

これからの事務所経営考える

4氏がリレートーク、次世代にバトン

石川県建築士事務所協会



約30人が参加した第1回リレートーク＝金沢

石川県建築士事務所協会（小林正澄会長）は3日、金沢市大和町の市民芸術村パフォーミングスペースで第1回リレートーク「これからの建築士事務所経営」を開き、それぞれ建築という大枠の中、業態の違うゲスト4氏をスピーカーに招き、これまでの経験や各社に

若手経営者や事業立ち上げを目指す若者らの意見を交わした。

この日は約30人が参加。冒頭、小林会長が「今回は協会会員の中で意匠系、構造系、兼業の住宅建築、一般建築土木の4つのジャンルの方に経験などを話していただき、今後、建築設計界がどう変わり、若い人を中心にどうしていくのかを考えながら交流を深めてほしい」とあいさつ。続いて司会を務める山岸敬広専務理事が日本建築士事務所協会連合会（日事連）の概ね50歳以下が建築設計界の未来について話し合う青年話創会を紹介したうえで「協会の登録会員の中で現在50歳以下と

なる開設者・管理建築士の会社数が67社あった。建築士事務所といってもさまざまなジャンルがあることから、それぞれの分野を越えた幅広い議論をしながら、今後の建築を考えていきたい。目標として一回4名に登壇して

もらい3年10回を一区切りとしたい」とリレートークの趣旨と今後の予定について説明した。この後、トークに移り、竹田法男氏（竹ノコウ本舗・構造設計室）が大学、大学院で構造を学び、東京やインドネシア、金沢で構造設計事務所や総合設計事務所を経験。5年前に構造設計事務所を立ち上げ、今年4月からは新卒2人を採用し3人体

制に。「独立時は既に一人娘が働いていたことや妻の収入が大きかったの

で独立開業のハードルは低かった」と振り返り、新卒2人の採用に関して「コロナ禍で大変悩んだが、同期2人雇えば互いに悩み事の相談や切磋琢磨することで辞めにくくなる」と説明。二人の給与の支払いでは、コロナ禍で借入が容易となったが、「私で可能な最大限の借入れをした」と給与3年分を確保。今後の若手2人の成長に期待を寄せた。

澤野恵氏（ヤマタタツケン）は、20年前に営業職の中途採用から15年目で社長に。顧客に暮らしながら社員自身が仕事を楽しんでもらうことを目標に「社員にいろんな発想やアイデアを出してもらっている」と語り、すべての社員が顧客と一緒に水性塗料でのペイントやDIYなどを行ったり、顧客満足や安全向上を目的に職人チームを構成し、現場と親密な関係を構築している取組などについて紹介した。

吉光臣文氏（吉光組）は建築系の大学卒業後、東京の大手ゼネコンの現場管理者として8年間を

過し、主に高層建築や大規模再開発などの現場を経験。02年に吉光組に入社し、13年から3代目社長に。04年には建築士事務所を開設して建築分野に参入。今後建築士事務所が生き残っていくには「マーケティング力が重要」とし、「ターゲットを絞ったり、いろんな場に出向き人脈を広げて情報を収集することが大事」と強調。そのために「人を惹きつける情報発信力を磨くことが重要」と指摘した。

引き続き、山岸氏が司会となり、参加者を変えての全体トークに移り、

それぞれの企業や立場での仕事の取り方やリクルート、人材・後継者育成などの取組を紹介しながら幅広い話題について意見交換した。